

# 生文カフェ & けん玉体験 日野と繋がる 日野で学ぶ



幼児保育専攻の教員が それぞれの専門分野から 「けん玉」について語ります

## 総合表現

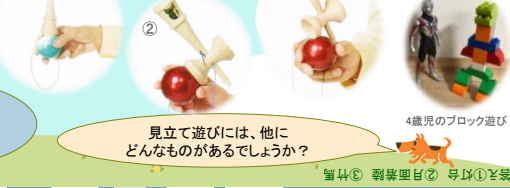
(音楽教育研究室 越山沙千子)

けん玉の技は数千～数万あると言われています。身近な人の技を真似し、習得する経験を積み重ねることで、新たな技が生み出されます。

けん玉の技には生活や遊びから生まれた技が数多くあります。身近なモノを別なモノで見立てる見立て遊びは、イメージしたものを自分なりに形にする創造的な表現活動です。

模倣は創造の源  
模倣と創造は対義語ですが、文化の歴史を紐解くと、「模倣→規則・形式からの逸脱→新たな文化の創造」というプロセスが見えてきます。

①～④は 何という技でしょうか？  
答えは右下



ペーターヴェンはソナタ形式を完成させ、壊し、ロマン派への扉を開いたと言われています。

見立て遊びには、他にどんなものがあるでしょうか？

## けん玉に見る言葉

～てとてとゆびと&からだぐるみのかしこさを～

☆科学絵本作家 かこさとし (加古里子) 先生『からだの本シリーズ全10巻』その第6巻『てとてとゆびと』(童心社)です。この本には、けん玉と人(ひと・ヒト・人間)との文化的・教育的(学習・発達・交流)なかわりについての大切な視点・観点(着眼点)が、とてもわかりやすく書かれています。

「おとな以上に手を動かすことが、子どもには大切が必要です。けれども、それは、なんでもかんでも手が、器用になればよい、わき目をふらず動かしていればよいというではありません。考える、工夫する、思案する ～そうした脳の働きを誘い、対応しているからこそ大切で大事なのだということ～ をくみとっていただきたいのが、私の願いです。」(32頁)

☆☆野口体操(野口三千三先生創出)をより実践的に個性的に開花させたつるまきさち先生の著作に、『からだぐるみのかしこさを～新たな人間関係の創出にむけて～』(野草社)があります。

☆☆野口先生は、『原初生命体としての人間』の中で次のように言います。「人間のからだ、それは皮膚という生きた袋の中に、液体的なものがいっぱい入っていて、その中に骨も内臓も浮かんでいるのだ」と。この野口体操を、日々の暮らしの中で丁寧に実践し、個性豊かな心身づくり体操(遊ぶ・学ぶ・喜ぶ)、「からだぐるみのかしこさづくり」として提唱・実行されたのが、つるまき先生でした。けん玉の歴史と現代の子どもたちとの関わりを知れば知るほど(具体例:パーチャルカルチャー・キッズ・UIP・ジャパンのHP等)、「からだぐるみのかしこさを」は、けん玉を知る言葉、けん玉に見る言葉のキーワードの一つとして迫ってくるのです。

☆☆☆けん玉は、私たちの暮らし(日常生活)の中にあるしなやかなで楽しく、かしい遊びであると同時に、すてきな体操だと実感します。けん玉は、十字状の「けん(剣)～けんと皿胴～」と穴の空いた「玉」を、約4.0cmの糸で結んだ玩具です。主な名称は「小皿・皿胴・大皿・中皿・けん・けん先・けんじり・糸・玉」です。てとてとゆびと、足・腰・目(からだ)をかしく使って、上手に操作し、玉を大中小の皿にのせたり、けん先で受け止めたりすることが基礎・基本の動作となります。そこから数えきれないほどの個性的な「技」と「術」が生まれてきます。

☆☆☆最後にとても興味深い一冊を研究同人が紹介してくれました。是非ご一読ください。

『りんごとけんだま』(鈴木康広著 ブロンズ新社 2017年10月25日初版)

(2019<令和元>年5月 初等教育実践研究・国語科教育 南雲成二)

## けん玉を科学の目から見よう!

(初等教育研究室(算数) 渡辺 敏)



投げられた卵を受け取るときに、どんなことに気を付けますか？衝撃を少なくして割れないように工夫しますね。けん玉もこれと同じことが言えます。



けん玉のお皿を手のひらで持ち

ひざを上下させて玉を受けとるときの衝撃を少なくしてみましよう。きつとまくキャッチできるよ!

けん玉の玉は「卵」けん玉の皿は受け「止める手」だと考えてみましょう。

## けん玉から広がる

## 幼児保育専攻の学び

(教育学研究室 田中正浩)

幼児たちは、一つの遊びを展開するなかで様々な経験をし、様々な能力や態度を身に付けていきます。保育の場では、遊びのなかで発達していく姿を様々な側面から総合的に捉え、発達に必要な経験を得られるような場をつくるのが大切になります。

小学校での生活科や総合的学習の時間では、子どもの気づきや思いを表現する体験的活動に配慮しつつ、国語や音楽、図画工作、体育など教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動を行っています。そこで今回、「けん玉」を題材にどのような遊び、学びが可能か幼児保育専攻の教員のそれぞれの専門性から提案してみました。

## 「こどもまつり」について

(幼児教育学研究室 井口眞美)



日野市内の児童館、ボーイスカウト協会等、多数の子育て支援団体が一同に会する盛大なイベントです。幼児保育専攻の1～3年生全員がこのイベントに参加し、けん玉をはじめ、魚釣り、輪投げ、野菜スタンプ等、様々な遊びを提供しています。

## けん玉の歴史

(保育学研究室 松田純子)

けん玉は、世界各地に存在していて、英語ではカップ・アンド・ボール(Cup and Ball)、フランス語ではビル・ボケ(Billeboquet)、ドイツ語でクゲル・ファング(Kugelfang)と呼ばれています。けん玉の起源については、フランスで生まれたという説や、ギリシャや中国という説など、いろいろな説がありますが、現在でも詳しいことは分かっていません。

古い記録では、16世紀のフランスで、「1585年の夏、街角で子どもたちがよく遊んでいる「ビル・ボケ」を、王様たちも遊ぶようになった」と書かれています。当時の国王アンリ3世が好んで遊んでいたという記事もあります。フランスの貴族や上流家庭のビル・ボケは象牙などを使い、彫刻がほどこされていて、とても高価なものでした。現在世界各地にあるけん玉の多くはこのビル・ボケが伝わったものと考えられています。

日本へは、シルクロードを通じて、1777年(安永6年)頃に長崎より広まったと言われています。義浪編『拳会角力図会・下』(1809年)や喜多村信節著『嬉遊笑覧』(1830年)によると、遊び方は玉を皿にすくい入れて勝ち負けを競う単純なものだったようです。また、その日の吉凶や待人の占いなどにも用いられたとあります。現在、私たちが親しんでいるけん玉は、大正時代に日本で生まれたもので、玉を太陽、皿を月に見立て「日月ボール」と呼ばれ、急速に普及していきました。1975年(昭和50年)、日本けん玉協会が設立され、競技用の「けん玉」と統一ルールが作られました。現在では、「けん玉」は玩具としてだけでなく、スポーツ競技としても人気が高まっています。



(参照: 公益社団法人日本けん玉協会ホームページ <http://kendama.or.jp/archives/history/>)

## 世代間交流ツールとしてのけん玉

(社会福祉学研究室 大澤朋子)

